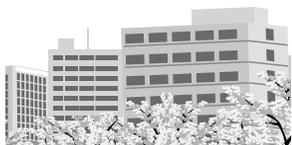


## 会員の広場



### 「大谷選手とドジャース戦法」

田中 克明（東京）

ドジャースの大谷選手の大活躍で、野球ファンならずともすっかり身近となったメジャーリーグだが、巨人軍の長嶋選手に憧れた昭和の野球少年にとっては、次元の違う世界だった。

それは、日米野球で1968年に来日したカージナルスのエース、ボブ・ギブソン（251勝）の

並外れた直球のスピードや、1971年に来日したオリオールズの4番バッター、フランク・ロビンソン（586本塁打）の豪快なホームランが目に見え付けられているからだ。

当時、物見遊山での来日と言われていたが、ここぞという時のパフォーマンスは凄く、日米の差をイヤというほど見せつけてくれた。

後になるが、ボブ・ギブソンと対戦した元ジャイアンツの高田氏は「野球人生で全く打てないと思っただけ」は、ボブ・ギブソンだけ」と、野球のYoutubeチャンネルで語っている。

もちろん、現在のメジャーリーグも先達に負けず劣らずのパワーとスピードを存分に發揮している。そんな世界でピッチャーとバッターの二刀流で大活躍する大谷選手は、当方にとって幼い時に観たボブ・ギブソンやフランク・ロビンソンを合

体したような存在だ。メジャーリーグの誰かが「大谷はロボットだ」と、語った記事をどこかで読んだ記憶があるが、大いにうなずける。

ところで、大谷選手が所属するドジャースが1950年代に編み出した「ドジャース戦法」というものをご存知だろうか。巨人軍の川上監督が、機動力と守備力を重視したこの戦法を採用し、日本シリーズ9連覇（1965年～1973年…以下9連覇）を達成したことで知られる。

「ドジャース戦法」は、その後の日本の野球界にも多大な影響を与えている。9連覇のメンバーで「ドジャース戦法」を熟知した広岡氏がヤクルトと西武の監督として、森氏が西武の監督として日本一に導いた。他球団も意識せずにはいられなかっただろう。

ついでにいうなら、ソフトバンクの輝かしい戦

績の基礎を築いたのも、9連覇メンバーの王監督（現会長）だ。

そして、「ドジャース戦法」は現在も生き続けている。大谷選手の移籍で、ドジャースの試合をテレビで観る機会が増えたが、足をからめて点を取り、固い守備力で勝ち抜く試合運びは、ズバリそのものだ。「足」の部分の多くを大谷選手が担っているのもすばらしい。

大谷、ベッツ、フリーマン3選手の大技と多彩な機動力、固い守備力で勝手を重ねるドジャース。ちよつと気は早いですが、ワールドシリーズ制覇に期待が高まる。

2009年のワールドシリーズで、ヤンキースの松井選手がMVPに輝いた時の興奮を、きつと大谷選手は味合わせてくれるに違いない。勝手に夢が膨らむばかりだ。